

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 14 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520279

研究課題名(和文)文学流通メディアとしての「ブッククラブ」事業とその影響に関する文化論的研究

研究課題名(英文)A Cultural Study on the History of Book Clubs in the United States

研究代表者

尾崎 俊介(OZAKI, Shunsuke)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：30242887

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：当該テーマについて各種文献を調査・研究した結果、以下のような著書・論文が研究成果として発表された：(1)単著の研究書として出版した『ホールデンの肖像』(新宿書房,2014年刊)は、1927年に創立された「ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ」、及び1990年代末に創立された「オプラズ・ブッククラブ」という二つの異なる種類のブッククラブを扱い、これらのブッククラブの創立経緯と発展経緯について詳細に論じている。(2)一方、「本を『語る』女たち」(『外国語研究』第47号所収)という論文では、ブッククラブの流行によってアメリカ人女性の間で読書ブームが定着したこと、及びその意外な弊害について論じた。

研究成果の概要(英文)：As a result of this study on the history of the book clubs in the United States, a book and a paper were published. (1)The book, The Portraits of Holden Caulfield (Shinjuku-Shobo, 2014), treats of two well-known book clubs in America, that is, "the Book-of-the-Month Club," a mail-order book sales club, and "Oprah's Book Club," a book discussion TV program. It deals with the prosperity and decline of those two book clubs, and also discusses the merits and demerits of "the book-club boom" in 20th century America. (2)A paper, "Oprah Winfrey and Her Disciples," describes in detail how one TV personality, Oprah Winfrey, created the 'book-club boom' in America at the turn of the century.

研究分野：人文学

キーワード：米文学 大衆文学

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者は、これまでアメリカにおける大衆的な本の出版、及びその流通史について研究を行ってきたが、その過程で、1990年代末以降のアメリカにおいて「オプラズ・ブッククラブ」に代表されるような「ブッククラブ」の一大ブームが巻き起こっていたことが判明した。だが、このような大衆的な文学ブームは、一般的なアメリカ文学史の中では完全に無視され、その文化史的な意義についても看過されがちである。

しかし、アメリカにおいて文学(大衆的なものであれ、高尚なものであれ)なるものが、どのような形で一般大衆に行きわたり、読まれているかということは、その圧倒的な読者層の大きさも考慮に入れば、それは既に評価の定まった(高尚な)文学作品を羅列すること以上に、「文学史」に記すべき事柄ではないのか?

このような問題意識に基づき、本研究では、アメリカにおける文学流通メディアの一つとして「ブッククラブ」を取り上げ、その歴史的發展経緯とその文化史的意義について、独自の調査を進めることとした。

2. 研究の目的

アメリカの人気テレビ司会者オブラ・ウィンフリーが企画した書評番組「オプラズ・ブッククラブ」の爆発的な人気に起因し、1990年代末以降、アメリカで大流行したブッククラブ・ブームの発展経緯を明らかにすると同時に、「オプラズ・ブッククラブ」に限らず、そもそもアメリカでブッククラブなるものがいつ頃発生し、それがいかなる経緯を辿って今日に至るまで存続しているのか、といったマクロ的視点からも調査を進め、もって「ブッククラブ」そのものを、書店や貸本屋などと並ぶもう一つの「文学メディア」と位置付け、アカデミックな観点から再評価することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は以下に示す3つの段階を踏んで進められた。

アメリカの「ブッククラブ」について可能な限り多くの一次資料・二次資料を収集・分析し、「集団で一冊の本を読み、またそれについて語る」という読書習慣が如何なる形でこの国に誕生し、定着していったかを調査する。

アメリカのブッククラブの中でも、特異な発展の仕方をした「ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ」を、ブッククラブなるものの一つのサンプルとして取り上げ、このブッククラブがいかにして誕生し、また発展していったかを調査しながら、広大な土地を持つがゆえに書店を通じた本の流通が非常に困難であったアメリカにおける、本と人の特殊な関

係について考察する。

前記の調査結果を踏まえた上で、1990年代末以降、「オプラズ・ブッククラブ」というテレビ番組を契機として生じた「ブッククラブ・ブーム」という流行現象を分析しながら、現代における本の読まれ方、とりわけ、ブッククラブ・ブームの主役である「女性読者」がいかに本を読んでいるか、ということについて考察を進め、アカデリズムの中では軽視されがちな一般大衆と本(文学作品)との出会いを取り持つ「ブッククラブ」というものの文化的意義について肯定的に再評価する。

4. 研究成果

本研究の結果、研究成果として発表された個々の論文・執筆物、あるいは学会における口頭発表について、その内容を簡略に記す。

(1) 単著『ホールデンの肖像 ペーパーバックからみるアメリカの読書文化』(新宿書房・2014年、303頁)は、過去十年ほどの間に科学研究費補助金(13710278、21520246、24520279)を使って行ったアメリカ大衆文学研究の総まとめとして刊行したものであり、本研究に直接係わる論文としては、本書第4章「ブッククラブ・クロニクル」に収めた2本の論文、すなわち「アメリカを変えたブッククラブ 「ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ」の過去・現在・未来」と、「本を語る女たち オプラズ・ブッククラブの隆盛とその影響」が挙げられる。

まず前者の梗概を述べると、本論の中心的なテーマは、1927年にアメリカで創設されたブッククラブ、「ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ」の誕生と発展、そして衰退の経緯と、その背後事情を論じることにある。

そもそもアメリカにおいてこのブッククラブが誕生したことの背景には、アメリカの広大な国土と貧弱な書店ネットワークがあった。通常、人は書店で本を買うわけだが、アメリカのように国土が広大で、その割に書店の数が少ない国の場合、書店を通じた書籍の販売は都市部に限られ、その他の地域に住むアメリカ人は、如何なる種類のものであれ、本とは無縁の生活を強いられてきた。

そこで書店のない地域の住民にも本、とりわけ文学作品を届けようという意図で1927年に作られたのが「ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブ」という組織である。これは年会費を払ったクラブの会員に、毎月一冊、クラブが選定した良質な文学作品を郵送で届けるというシステムによって運営されていた。書店を通じてではなく、郵送によって本を読者のもとに届けるという同クラブの運営方法は、実は世界に数多ある「ブッククラブ」の中でも非常に特異なもので、アメリカ独自の国土事情に基づいた非常に「アメリカ的」なブッククラブであると言える。

その後、1930年代の大不況の時代や、第二次世界大戦時の時代など、娯楽産業が全般的に振るわない中、比較的安価な出費で楽しめる娯楽としてアメリカで読書ブームが訪れると、ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブの人気も急上昇し、一時は会員数も88万人を超えるほどになる。これは、このクラブに選定された文学作品は、その時点でミリオンセラーがほぼ確実になることを意味するわけで、一つのクラブの存在が、文学作品の価値を決定するようになったとも言える。事実、ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブによって選定されたために、その文学的価値が掘り起こされた小説もあり、またそうした小説を書いた小説家の中からノーベル賞受賞者も現われるなど、ブッククラブが単なる本の流通メディアを越える役割を果たすようになるのである。

しかし、その後1970年代に入ると、娯楽の多様化、書店チェーンの興隆、アメリカ人の読書嗜好の一元化、さらにはインターネット書店「アマゾン」の登場といった様々な要因が生じ、ブック・オブ・ザ・マンズ・クラブの人気にも陰りが見え始め、1994年には、クラブの顔であった「ブック・オブ・ザ・マンズ」の選定が停止されて、このブッククラブは、数多あるインターネット上の書店と変わらぬものになってしまう。

このように、時代の流れに伴って隆盛と衰退を経験することになったブック・オブ・ザ・マンズ・クラブだが、その隆盛と衰退の中に、アメリカにおける本と人との関係が明確に記されている点で、非常に興味深いメディアであることは間違いない。本論では、そうした点に着目しながら、本クラブの文化的意義を確認した。

続いてもう一本の論文、「本を語る女たち オプラズ・ブッククラブの隆盛とその影響」の梗概を述べる。

アメリカのテレビ番組「オプラ・ウィンフリー・ショー」の1コーナーとして1997年に誕生した書評番組「オプラズ・ブッククラブ」は、司会者であるオプラ・ウィンフリーの絶大なる人気も手伝って、たちまちアメリカ中にブッククラブ・ブームを巻き起こすこととなった。

もともとアメリカでは、中流階級の主婦の間の娯楽として、1冊の本を読み合い、感想を述べ合う「ブッククラブ」の活動が連綿と続いていたのだが、オプラズ・ブッククラブの成功を機に、全米で50万ものブッククラブが結成されるようになると、この龐大な中流階級・女性読者層が、「本の購買層」として大きな意味を持ち始めることとなる。つまり、これらのブッククラブに選定されるような、中流階級の女性好みの小説ばかりが爆発的に売れるようになる一方、文学的には価値が高くとも、女性受けはしないような作品、例えば前衛的な小説や、性的・暴力的なシー

ンを含むような小説は売れなくなる、というような現象も生じてくる。

中流階級・女性読者層のこのような「嗜好」によって、売れる小説と売れない小説の間に線引きがなされることになってしまった、というのが、21世紀初頭のアメリカにおける文学シーンの特徴となったわけだが、そうなれば、このような現状に異を唱える人々が出てくるのも当然であろう。特にブームに乗って小説を読み始めた女性たちへの侮蔑ないし反感を持った人々、とりわけ高踏な（ハイブラウな）文学愛好者のブッククラブに対する揶揄的な言動も顕著になってくるのだが、そのような文学愛好者の多くが男性であることから、ブッククラブをめぐる言説上の争いは、「女性」対「男性」の対立という側面も持ちながら、次第にヒートアップしていく。

そしてその対立の構図の象徴的な顕れとなったのが、いわゆる「ジョナサン・フランゼン事件」で、この事件を契機として、アメリカで今、ハイブラウな男性読者層と、中流階級（＝ミドルブラウ）の女性読者層の間の溝が、かつてないほどに深まっているのである。

本論では、ブッククラブ・ブームを契機として顕著になってきた階級間／男女間の文化的対立の在り様を明らかにしつつ、ブッククラブなるものによって読書ブームが訪れたことが、決して単純に喜べない現象であることを明らかにした。

なお本書に対しては、『週刊ポスト』（坪内祐三氏）、『週刊読書人』（大串尚代氏）、『北海道新聞』（越川芳明氏）、『北國新聞』『河北新報』『愛媛新聞』『宮崎日日新聞』『沖縄タイムス』（以上、栗原裕一郎氏）、『みすず』（長谷正人氏）、『週刊新潮』『日刊ゲンダイ』『出版ニュース』『望星』に好意的な書評が出たことを併せて記しておく。

(2) 論文「本を「語る」女たち：アメリカにおける「オプラズ・ブッククラブ」の隆盛とその影響について」（『外国語研究』第47号所収）は、1990年代末、アメリカやイギリスで大流行したブッククラブ・ブームを取り上げ、その文化的事象の背景にあるものを探ったものである。

アメリカにおける「オプラズ・ブッククラブ」、イギリスにおける「リチャード&ジュディ・ブッククラブ」など、英米社会においてブッククラブの隆盛が顕著であるが、これら人気テレビ番組をきっかけにしたものに限らず、彼の地におけるブッククラブ人気は日本人が想像する以上に高い。とりわけ中流階級の主婦の間では、月に一度くらいのペースでメンバーが集まっては一冊の本を巡ってディスカッションをする、そんな風習が当たり前のように根付いている。我が国で「読書」と言うと、依然として「個人の営み」という印象があるものの、今、イギリスやアメ

リカで読書と言え、むしろ「社交」に近いとすら言える。

もっとも女性を主たるメンバーとする社交的ブッククラブの流行には、特有の問題も幾つかある。この種のブッククラブに参加する女性たちの多くは、高学歴・高収入・保守的であることなど、非常に均質的なところがあり、本に対する好みも似通っているため、クラブで読む本を選択する際、「女性作家の手になる／女性登場人物の多い／上品な本」ばかりが選ばれる傾向があるのだが、その結果、近年の英国・米国の文学市場において、そうした女性受けする中流階級向け（＝ミドルブラウ向け）な本だけが爆発的に売れるようになってしまったということが一つ。さらにブッククラブ・ブームに対する反感・反発から、高尚な（＝ハイブラウな）文学作品を好む層、及び大衆的な（＝ローブラウな）ジャンル小説などを好む層などが、共に「アンチ・ブッククラブ」の旗印を掲げ出すなど、ハイブラウ文化・ミドルブラウ文化・ローブラウ文化の間の妙な対立が顕著になり出すといった、あまり好ましくない現象をも生み出すに至っている。

しかし、そうした諸問題を抱えつつも、なぜ女性たちは集団で本を読み、語るのか。本論では、日本でまだあまり知られていない英米のブッククラブ事情を紹介しつつ、現代における読書習慣の諸相について考察を試みた。

（3）著書・論文執筆以外に、本研究の成果公開の機会として、以下のような学会発表を行った。

2013年4月21日に行った日本アメリカ文学会第30回中部支部大会における研究発表、「本を語る：英米ブッククラブ事情」では、既述した「オプラズ・ブッククラブ」やイギリスにおける「リチャード&ジュディ・ブッククラブ」など、人気テレビ番組を発端とするブッククラブ・ブームが1990年代末から英米両国で生じた結果、これらのテレビ番組に触発された中流階級の女性たちが突然、文学作品の読者層として急浮上してきたこと、さらに、そうした女性を主要なメンバーとするブッククラブの隆盛によって、女性に好まれるようなタイプの文学作品だけが売れるようになるなど、文学「市場」に顕著な傾向が生まれてしまい、これを批判する（男性中心の）教養階級との間で、一種の文化闘争が生じていることを指摘し、ブッククラブの隆盛は、ただ単に本を読む人口が増えた、ということの意味するのではなく、むしろ女性・中流階級と男性・上流階級との間に潜在的に存在したある種の文化間ギャップを露わにする結果となっていることを論じた。

（4）本項の最後に、3カ年に亘る本研究についての成果と、それに係わる反省点、そして今後の展望を記しておく。

当初の計画では、3カ年の研究期間のうち、最初の2年を調査・研究に費やし、最終年度となる3年目については、単発の論文の発表や学会発表を控え、研究書（単行本）の執筆に専念することを目指していた。実際、その計画に従って3年目となる2014年度に、これまでの研究成果を単著『ホールデンの肖像 ペーパーバックからみるアメリカの読書文化』として公けにすることができ、また本書に対する各種書評の中でその研究内容が高く評価されたことは、大きな成果であったと言える。

ただ本研究を計画していた時には、アメリカのブッククラブのみならず、イギリスのブッククラブについても論じることを盛り込んでいたのだが、これに関しては十分な成果が上がらず、出版した単著の中の一章を割くことができなかった。この点については大いに反省している。

ただし、イギリスにおけるブッククラブについても資料だけは相当数を集めることができたので、今後とも継続的に研究を続け、論文の形にまとめていくことを計画している。

また、本研究を通じ、「（アメリカにおいて）世の女性たちは、どのようなジャンルの本をどのような形で読んでいるか」ということに着目して研究を進め、その結果、ある程度の結論を得ることに成功したわけだが、この研究を通じ、また新たな研究テーマとして「（アメリカにおいて）一般に男性は、どのような種類の本を、どのような形で読んでいるか」ということが気になり出し、現在、その方面での研究をスタートさせているところである。この研究により、通常の文学史が無視してきた、あるいは、通常の文学史ではとらえきれないような、一般大衆の「本」嗜好に脚光を当てることができればと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

尾崎 俊介、「本を「語る」女たち：アメリカにおける「オプラズ・ブッククラブ」の隆盛とその影響について」『外国語研究』（愛知教育大学外国語外国文学研究会）第47号、2014年、17-33、査読無。

〔学会発表〕（計1件）

尾崎 俊介、「本を語る：英米ブッククラブ事情」日本アメリカ文学会第30回中部支部大会、2013年4月21日。於中京大学。

〔図書〕（計1件）

尾崎 俊介、『ホールデンの肖像 ペーパーバックからみるアメリカの読書文化』（新宿

書房・2014年、303頁）

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾崎 俊介 (OZAKI, Shunsuke)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30242887

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：